イオム

Eldonas Kou MUKAI
2-12-12, ASAHIMACHI, ABENO, OSAKA, JAPANIO
25, AUG. 1983 N-ro 270

イオム通信

大阪市阿倍野区旭町2-12-2　向井 孝

つれてこられた"都市の反原発運動私論"

1.京都8.7.28反原発全国集会を前に

● 久米三四郎さんからきた〈手紙〉に「…原発推進派が、様替りの情況でオタオタしてますのに、反原発派まで、気の抜けたような現状……」とあって、ほんまにそうやと思った。

このごろのぼくの周辺だけに限って云えば、例えば、女グループも不払い連も、エライ沈滞というより、あるかないかの惹弱ぶりで日常活動はおろか、最低のグループ維持の基本線〈定例活動〉も息絶え絶え……のありさま。そして、ぼく自身も。

● 5~6年前、発足した当時は、エライ意気ごみやったし、元気もあった。

行動を創ることが面白くてたまらん、という風やった。つまりその行動の中で、まず自分が解放されるのが、うれしかった

それは、運動の新しいやり方として、大阪のその他のいろんな運動に伝染し、思わぬところへもひろがった。

仮装デモや、ゲリラシアターや、大阪弁のシュプレヒコールや、一分間アピール、掛合い漫才など、もうそれらは私らだけでなく、どこでも、誰もが気軽るにやりだしてる。

● ところがこっちはもう、そんなやり方も出つくして、すっかり慣れてての二番、三番センジということになると、だんだん、おもしろくない。後から参加した新人が、初めての経験にキャーキャーばかりはしゃぐのをみて、なるべく新人をたてて、自分はその新人がよろこぶのをみてよろこんだり、アホらしなって白けたり…。つまりはだんだんくたびれて、新くも来なくなると、いつのまにか、気分は、あーァしんどいナァ。

● 一体どうなってしもたんやろ。ぼくらが反原発を云いだしたのは、'79年夏。そのとき反原発運動は、「私達の生き方をかえ、くらし方をかえる」―新しい質の、80年代闘争の焦点になる革命運動や!―と全身をゆさぶられるおもいで感じたもんやった。

そして、〈イオム二五号〉で

ヤ一に、「一ど、反原発にかゝわると、もうやめられない」

ヤ二に、「反原発の、うけうり話が、誰彼かまわずしたくなる」

ヤ三に、「本をあさって、原発ものしり、にすぐなってしまう」

ヤ四に、「この世の中が変る、それでなければ破滅するー、その覚悟ができてくる」

ヤ五に、「自分の生き方、くらし方を問題とし、変ってくると言いたり、しやべったりした。あれは思いちがいやったんか。

● ベトナム戦争が終ってからの、'70年代運動の下降沈滞がずうっと続いていたそのころ、80年代闘争を云うのは、大分先走りやった。まして、80年代運動の、あるべき新しい質と結びつけて、まだ船ど客もあらわさぬ反原発を、80年代闘争の最大の連帯におくというのは、早合点の先物買いと云われかねへんかった。

● 七九年三月、スリーマイル島事故がおこったとき、ぼくは「あっ、ちょっと早すぎた!」と思った。というのは〈イオム29号〉にかいたように)

『原発の大事故がそのうちきっと起る。それが政治的なものか、その一歩手前か、何れにしてもそれを推進派のやりかたを大きく変えさせる転機にしなくてはならない。残念ながら、それは反原発運動の力によって原発推進派に打撃を与え、政策を転換させるというわけではない。がしかし、そのときこそ反原発運動の存在とその真価が試される。いまあたりを見廻してもぼくらの運動はいさゝか弱い。推進派の物量作戦に対して、たゞ防衛抵抗するだけで、致命的打撃の一指をも与えることができないでいる。

だが大事故のそのときはじめて、市民の世論を背後にして、どれだけの攻撃に立上ることができるか。その力をいまでの日常活動でどれだけにくわえてきたかが、試される。そのためにこそ、今ぼくらの運動がある』『たとえばベトナム戦争で、米軍は決して個々の戦闘に敗けたのではない。ベトナム解放軍は、長い戦争中、どのように打撃をうけても闘いをやめることなくーその敗れてしまわなかったということにおいて闘いつづけた。そして遂に、米軍が戦闘をやめベトナムを撤収するという最後のとき、船ど無抵抗なサイゴンへと攻めこんで米軍を追い出し、最終戦局のヘゲモニー、勝利をにぎったのである。』『とすれば、そのような最後のとき、私たち反原発運動が、そのサイゴンまで攻めこめるか?が、いまの問題である』

そしてこのスリーマイル島原発事やそのごに発覚した数多原発事故がかくしは、市民の世論をよめかせた点だけでも、原発推進派に致命的打撃を与える可能性をもってたことは間違いない。もしあのとき全国の反原発のグループが、それこそ決死のおもいで全国一せいに蜂起し、決戦を挑むまでの力をつくっていたら、運動丈の力だけでなく世論をとり込むことによって、敵のよろめいている弱勝への一けりが決定的打撃の転換点になったかもしれない。

● 運動は、運動の力だけでは厂史に登場することはできない。

時代の波と出会うことで、大きな影響力をもち、歴史をつくるものとなる。その意味で、歴史の長い波長のうねりと、そのうねりの中にも現われる大きな波の高まりを予測し、とらえることは、運動にとって不可欠の一面といえる。

64年のビキニ水爆実験を契機とする原水禁運動。60年の安保闘争。ベトナム戦争による68・70年のベトナム反戦と全共闘運動——それらはどれも、史上にはじめての、新しい質の運動の崩芽として現われることで、時代の波を味方した。その波のカと共にあることで世論をひきつけ、権力を大きくゆるがすものとなった。そして又、その新しい運動の質を徹底化しえなかったことで坐折していった——

● そして、では、いよいよ80年代闘争としての反原発運動は——77~8年ごろと比べれば、何十倍ぐらいにひろがったことは否めない。

だがいま、もう83年。たしかに私たちの運動は、全国各地にグループがふえて一定の展開をしたものの、質的な高揚期をつくり出すことがないまま、景気久米さんが云うように、なんとなく停滞気味というほかない。しかも反原発が80年代闘争の新しい質としてつくり出しひろげ、他の運動へも伝播波及すべきものが、いつしか固定化し、そのかたち(旧態依然)の部分をのこしてゐを、きめかけている。このままおくかりにニたびスリーマイル的事故があって体制側に大打撃をうえ政策転換がされたとしても、反原発側がヘゲモニーをとった方向には向わないだろう。いわんや運動の高揚は、一過性のものでしかない現象に終るにちがいない。

● ほんまに一体ぼくが云っていた80年代闘争としての反原発はどうなってしもたんやろか。なんでこうなってきたんか、ぼくだけのそとに視点をして成行きを考えてみるとー

まず、はじめにあったぼくのたち方は……

● ふつう運動というのは、

① 相手の出方を監視する。
② そのやり方に、介入し抗議する。
③ 相手のやり方に参加して、路線を変える
④ 相手のやり方を妨害したり抵抗したり、又は攻撃を加えてその企図をくじくーという四つのやり方の考化と組合せーである。

ところがぼくら都市に住む者には、肝じんのその相手の姿が見えへん。具体的関係としての敵の姿をとらえることができへんのにどうやって、運動の四つのやり方)を進めるか、という問題がでてくる。(そこで、核燃料輸送監視行動とか能登核燃料工場拡張抗議とか、比較的近隣の原発建設予定地へ日帰り(つまり非現地)を見付けて相手とする一方、せいぜい市民大衆相手の啓蒙宣伝と、仲間あつめのために学習会、講演会をひらくことになる。また、その(非現地)を見付けることができないとき、都市の反原発運動は(学習会や講演会だけでなく)どこかの(現地)と縁故をむすび、信頼関係をつくって連帯支援しなければー)ということが出てくる。それらは結局、都市での反原発をつくり出せず、都市も又現地に依る以外にないこと、つまり都市を根拠にした反原発運動はない—現地にとって都市は敵—ということを意味している。

● ところで、原発問題の本質はすこぶる都市的で、市民そのものの問題やいうことは、くどくど説明せずとも、雷気を必要とし大量消費する都市生活文化をあげるだけで充分やろう。(以下脱足)

● つまり都市の反原発運動の相手(対象)は、ざっくばらんにいって、自分をも含めた都市住民—市民。ないかそれば原発を必要とするほどの豊かさを求めている都市型生活そのものに外ならない。そのことが判っていてなお、私らは巨大科学と高度成長経済がつくり出し行きついた原発社会のなかで、もつと豊かなくらしを!というものほしげな日常から、なかなか脱出でけへん。脱出するのがむずかしい。口にすることはできても、それを相手に、どう運動してよいのかもわからへん。

● 政府や電力、推進派は何よりもこの、都市反原発派の弱味をよく知ってる。その上で原発どうでもよい派の絶対多数市民の無関心層が、いつまでもその状況であることをのぞんでいる。

年間数百億円の宣伝費をつかって、原発推進—原子力賛美のイメージキャンペーンが、現地に向けてでなく、都市・市民を相手にくりかえしくりかえしやられているのは、その証しでもある。

● 都市市民は、無関心でありながら、中立的というより、推進派の巧妙なイメージづくりの中で、まんまと推進派の期待通りの意識状況になっている。しかもキャンペーンは思い通りのやり放題。とすればー

この状況を放っておいてよいんか。いやこの都市・市民の状況こそが、都市反原発にとっての、真正面に据えた、対象課題—相手ではないんかーということから、生れてきたのが、木村氏達などが云う〈運動論〉としての〈宣伝戦争論〉である。

つまりこれは〈四つのやり方〉の現地的運動論とは別の質のやり方ちがう運動とおもわばならない。

この〈宣伝戦争〉としての都市反原発を「目的意識的」にはっきりとらえて活動をすることで、例えばはじめてスリーマイル島事故などで動揺する市民や敵を自分らの側にひきつけ運動の力をして、推進派のよろめく弱腰をけつとばすことができる。そんな状況を自分の手に掘ることができる。

● ところで〈宣伝戦争〉は、こちらから仕掛けるもくや、スケジュール申告や定例活動とは別に、状況をつくり、やり方を工夫し、スタイルを創造する闘いや。きいてるか、みてるか判らん相手を、何や、何やとふりむかせ、耳にきこえたら忘れられん、眼でみたら験にやきつく、イメージ創出の斗いである。

● しかし、それもしよう中となると、しかもいつも同じ人間が仕掛け人というのでは、やはりくたびれる。あっちでもこっちでも、というので綜合して宣伝戦争がされるのでなければ小さな動きの一つ二つなどすぐ紛れて消えてしまう、よけいしんどくなる……(未完)(もうすこしで終るかんじんなところで原稿トンボ。ご容赦)

▼急告 9/15東京でひらかれる〈大衆集会としがらみ〉ビラの講演ラインにぼくの名があがりますが、全く事前連絡すらの掲載で、当日出席は都合で出来ません。会の趣旨には賛成ですが、不参を主催者に申入れました。以上ご了承下さい。ビラをみた方におわらせします。